

友を祝し給はずば

朝は病房を輝かし 寒氣凜然、

東天の下、今し、茶毘に附す友の煙ひとすじゆるやかに銀孤を描く

……父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈禱を聴き容れ給へ

見ろよ、あの人はよつぽど気立がやさしいとみえて、

煙まで静かだぜ……」

うんにやあ、さつぢやあんめえよ。あんまり長く

わずらつたで、ぽんぽん昇る元気がねえずら。」

さつきやなあ、でもまあ、こげえいい日に焼かれりやあ、

気持ちよく成佛出来るだんべ。」

違えねえ、おいらも早く引取つて貰えてえもんだ、

娑婆の朝はこげえに寒いで……

農舎の庭の小溜りに

就業の前のひと時を

焚火を囲んで農夫らの明るい談笑……

友等よ、のどかなその明け暮れよ、屈託のない生存よ、

霜は足下から解けかゝり

鳥は婆々と晴天を歌ふ

茶毘の煙は虔しく朝日の縞にたなびき

火葬場からは一ぱいに溢れて来る

和やかな聖歌、祈禱の聲

・ ・ ・ ・ ・ 父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈禱を聴き容れ給へ。

(昭和十四年「山桜」二月号)